

『源氏物語絵巻』 詞書の用語と表現

——『源氏物語』 本文との対比による国語学的考察——

関 一 雄

【本稿の要点】

1. 「詞書(絵詞)」は物語本文という一部の国文学者の考え方は、ミクロな視点からすると必ずしも精確とは言えない。
2. 「詞書」は、絵を中心に、そこに描かれた人物の言動(会話・仕草)を書いて展開され、そこで完結を見る。
3. 「詞書」は、それが書かれた時期の日常的用語に影響を受け、物語本文の用語をさかしらに改める一面をもつ。
4. 物語本文は、語り手のポジションを通して、登場人物の言動・心理等を詳細かつ濃密に描き上げ、次なる場面を予告・誘導する。
5. 物語本文は、絵から独立し、物語映像の世界を構築している。

△参考文献▽

- (i) 玉上琢彌 『源氏物語研究』 △源氏物語評釈別巻一▽
(角川書店 1966)
- (ii) 高橋亨 『物語と絵の遠近法』 (ベリかん社 1991)
- (iii) 久下裕利 『源氏物語絵巻を読む』 (笠間書院 1996)

『源氏物語絵巻』 詞書の用語と表現

——『源氏物語』 本文との対比による国語学的考察——

- (iv) 石井正己 『絵と語りから物語を読む』 (大修館書店 1997)
- (v) 三谷邦明・三田村雅子 『源氏物語絵巻の謎を読み解く』
(角川書店 1998)

はじめに 「詞書」に関する国文学者の研究に関連して――

△参考文献▽(i)に収められている「隆能源氏絵詞「蓬生」鑑賞」(初出「関西大学『国文学』第二十九号、1960)の末尾に「絵と詞書とを見合わせると、物語の本文にあつて詞書に省略したのは、このように、それぞれ意味あつてのことと考へうる。この考へは、はたして、当たっているかないか、さらに検討をつづけねばならぬ。」とあつて、「詞書」研究の実践と今後の更なる検討の必要性が説かれていた。しかし、管見による限り、多くの国文学者(特に、源氏物語研究者)の関心は、『源氏物語絵巻』の「絵」の方には向かつて、「詞書」の方には玉上氏の期待した程には、向かつていないようである。汗牛充棟といつてよい程の源氏物語の研究書の一部分すらも見ているとは言えない稿者にこのようなことを言う資格はないのであるが、物語と絵画の相関関係を究明したとする(ii)では「詞

書」はほとんど採り上げられていない。この書の最初の方(P19) 23に絵巻の「東屋(二)」が採り上げられ、物語本文が引用されて論が展開されているのだが、「詞書」については、「東屋(二)の絵巻の詞書は、①の途中「忍びやかに」から始まり、本文の異同はさほど大きくなく、ほぼ同文である。」として、「絵はほぼ忠実に物語テクストに基づくが、……」という記述が続いていく。また、(iii)では、P1に「物語映像は絵だけによって実感され得るのではなく、それを支える詞書が常にもとにあつたことを忘れてはならない。」とあつて、それには同感なのだが、著者は続けて「つまり詞書(≠物語本文)なくして引目鉤鼻の手法も拵けなかつたのであろう。」(傍線稿者)と書いている。これは、絵巻の詞書イコール物語本文という説明と見て差し支えなからう。ただ疑問なのは、P12から始まる、1/18蓬生/図を読む―末摘花との再会の章の「I省略された詞書本文」の項では、前述の玉上論文が採り上げられ、「詞書本文」「源氏物語本文」との相違が、著者の観点から論じられており、前掲の記述との相違に戸惑いを覚えるのである。又、これより前「夕霧」巻に言及したところでは物語本文と絵巻「詞書」との相違点が部分的に指摘されている(この点については後述)。この書で実質的に問題にすべきは、本稿で「夕霧」巻の後で採り上げようとする「橘姫」巻に関する論述部分で、「詞書」は引用されず、源氏物語本文が引用され、しかも「物語本文(絵巻詞書もほぼ同文)」は次のようになっていゝ。/(傍線稿者)のような記述があることである。後述する如く、物語本文と「詞書」とは、「ほぼ同文」ではすまされないかなりの相違を見せていることである。更には、「4/宿木/第三図を読む―琵琶相伝」の項でも物語本文が引用されているが、「詞書」との細部にわたる相違は論述されていない。

この点で(iv)には、「柏木(二)」の「詞書」を採り上げ、その現代語訳を試みた後で、「現代語に訳すという、基本的なことからは始めなければならぬ」という理由がある。これまで「源氏物語絵巻」を分析したり紹介したりするとき、そこで採り上げられている本文は、実は、「源氏物語絵巻」の「詞書」ではなく、「源氏物語」の本文である場合がほとんどだからである。つまり、「源氏物語絵巻」を読むと言いつつ、実は「源氏物語」の本文を読んでいるのが実情なのだ。(P28-29)とある指摘に稿者は同意したい。

次に(v)には、絵と「詞書」と源氏物語本文との相違に関する指摘が何箇所かに見受けられるが、この書は絵の解析(謎解き)に主眼が置かれているためか、「詞書」と物語本文の微細な相違には具体的な記述はほとんどなされていないのである。

本稿は、以上のような国文学者の研究の現状を一応踏まえた上で、『源氏物語絵巻』の詞書と「源氏物語」本文とを、子細に検討して見ると、両者には基本的にかなり相違する点のあることを明らかにし、表題のテーマに迫って見たい。

一 夕霧巻の詞書と物語本文

詞書は田島毓堂『源氏物語絵巻詞書総索引』(1994)の本文篇により、物語本文は、『日本古典文学大系』による。掲出の順序は、物語本文・詞書(内)に示すとし、双方のいずれかに無い部分相違する語句に傍線を付し、後にコメントするものには番号・記号

を添える。

① 知らぬやうにて、君たちもてあそび紛らはしつゝ、わが昼のおましに夕霧¹臥し給へり。宵過ぐるほどにぞ、この御返りも参れるを、かく例にもあらぬ鳥の跡のやうなれば、とみにも見解き給はで、大となぶらちかう取りよせて見給ふ。女君²居座³、もの隔てたるやうなれど、いと疾く見つけ。給うてはひよりて、御うしろよりとり給うつ。

① ひるのおましにうちふしたまへるに、この御かへりもてまいれるが、れいにもあらずと※へと√りのあとのやうなれば、とみにもえみときたまはぬに、へだてたるやうなれど、いとくみつけてはるよりて、うしろよりとりたまひつ。

② 夕巻「あさましう。こはいかにし給ふぞ。あな、けしからず。六条のひんがしのうへの御文なり。今朝、風おこりて悩ましげにし給へるを、院の御前にはべりて、出でつるほど、又もまうですなりぬれば、いとほしさに、『今のま、いかに』ときこえたりつるなり。

② あさまして、こはいかにしたまへる。わざぞ。あなけしからず。六条のひんがしのうへの御ふみなり。けさかぜおこりてなやましげにしたまへるを、院のおまへにはべりつるほどに、またもかへりまいり※なりぬるいとをしさ『いまのほど、いかに』ときこえつるなり。

③ 見給へよ。けさうびたる文のさまか。さて、なをくしの御さまや。年月に添へて、いたうあなづり給ふこそ、うれたけれ。思はむ所をむげに「恥ぢ給はぬよ」とうちうめきて、惜しみ顔にもひ

こじろひ給はねば、

③ みたまへ、けさうしたるふみか」と※へ、√きこえて「さてもなをくしの御さまや。としつきにそへていたくあなづりたまふよ。おもはむころを、はぢたまへかし」と あはめられて、

④ 室居雁「さすがにふとも見でも給へり。」年月に添ふるあなづらはしさは御心ならひなべかめり」とばかり、かくうるはしだち給へるには、かりて、若やかにをかしきさましての給へば、夕霧¹うち笑ひて、「そはともかくもあらむ。」
④ 「とし月にそふあなづりはおほむころならひにこそ」とて、ふともさすがにみたまはでもたまへり。

【参考】 竹河(二)八一部分

⑤ 夕つけて、四位の侍従、悪まあり。給へり。そこら大人しき若きん、だちもあまたさまぐにいづれかはわろび、たりつる。

⑤ しめのじゅうもまいり。たまへり。そこらおとなしきわかきんだちもあまたさまぐにいづれかわろび、たまへる。

(中略)

⑥ お前近き若木の梅、心もとなくつぼみて、うぐひすの初声もいとおほどかなるに、いとすかせたてまつらまほしきさまの、し給へれば、人々はかなき事をいふに、事少なに心にき程なるをねたがりて、宰相の君と聞ゆる上臈のよみかけ給ふ。

折りて見ばいと、匂ひもまさるやとすこし色めけ梅の初花

⑥

おまへちかきわかぎのむめのこゝろもとなくつばみて、うぐひすはつこゑいとおほどかなるいとすかせたてまつらまほしきさまのしたまへれば、中將のきみときこえて上らうのよみかけ きこゆる

をりてみばいとゝにほひもまさるやとすこしいろめけむめのはつはな

(大系 4 二五七—二五九 べ)

1

夕霧巻の物語本文①の傍線部1「宵過ぐるほどにぞ」と、傍線部3「大となぶら近う取りよせて見給ふ。」は、「詞書」には無い。「詞書」①では「ひるのおましにうちふしたまへるに」から、「この御かへりもてまられる」に直接続いている。

この場面は物語本文では、夕霧は落葉宮の返事を待っていたが、宮の返事は無く、母御息所からの消息が宵を過ぎた頃に夕霧のもとに届いたので、傍線部3「大となぶら(御殿油)ちかう取りよせて見給ふ」ことになっており、傍線部2の「かく」は、この場面の少し前に、御息所が「目押しししほりて」「病で衰弱切つて目がくらむのを扶うようにする動作」消息を書いたことを受けている語である。「詞書」はこの場面のみを切り放し、昼間の場面としているのである^(註)。当然、絵には「大となぶら」は描かれていない。また、絵に画かれているのは、「詞書」の「一でくくった部分であり、女君(雲居雁)が消息を奪い取る直前の場面である。ここで物語本文では、傍線部4「女君」があるが、「詞書」に無いの

は、絵を見れば分かるからである。更に両者の相違は、物語本文では女君の「見つけ」という動作に、傍線部6「給(う)ふ」という尊敬語をつけていることである。これは女君のこの動作がここで一旦区切れる効果を果たしている。「給ふ」のない「詞書」は、「みつけてはひよりて」までを、区切れない一続きの動作としてしまい、絵の説明に過ぎない表現となっていると認められよう。なお、物語本文の傍線部5「も」は、この場面に微妙な陰影を施す語と解したい。

(注)

石井正己「描かれた女房―『源氏物語絵巻』の方法―」(国文学解釈と教材の研究 1999年4月号)によれば、この点につき、「この部分を『源氏物語』本文と較べると、「宵過ぐるほどにぞ」や「御殿油近う取り寄せて見たまふ」といった記述がない。この絵巻は時間に関する叙述を省略することがあるが、こゝもそのケースに当たる。」と説明する。これによれば、『源氏物語』本文と同じく「宵過ぐるほど」を描いたものということになりそうである。しかし、夜中の場面を描いた「横笛」巻の絵には、「御殿油」が画面の中央よりやや右に描かれており、それが描かれていない「夕霧」巻の場面は、昼のこととしてよいのではないか。なお、前掲の参考文献(ii)には、「物語本文の時刻は「宵過ぐるほど」で暗いからさらに読みづらく、「御殿油近う取り寄せて見たまふ」とあるが、絵巻詞書はそれらを改変欠脱して「昼の御座」でのこととする。つまり絵巻画面には燈火が描かれぬ訳である。」とある。宵になつても、「昼の御座」に居たとも考えられなくもないが、「横笛」巻との相違を重視して、「昼間」の場面に改変したとす

る説に従いたい。

2

1で、物語本文の方であつて、「詞書」に無い語句について述べたが、ここでは「詞書」にあつて、物語本文に無い語を中心に述べる。まず、「詞書」、②傍線部、8「わざ」という語が使われているが、物語本文②にはこの語が無い。「わざ」という語については、東辻保和氏が「こと」と対比して、詳細に論じている¹⁵。それによれば、この「わざ」は、その用法の21「見当のつかぬ事態の現出」に相当するものと見なされる。この部分は、夕霧が女君に対して言う会話であつて、「わざ」を用いない物語本文の会話よりも強い口調になつてゐる。

またそれに先行する「詞書」、②の傍線部、7「あさましくて」、物語本文②の傍線部「7あさましく」は、「詞書」が地の文、物語本文が夕霧の会話文になつてゐる。この場合「詞書」は語り手がそのノーマルなポジション(定位置)から夕霧の気持ちを解説しているのに対し、物語本文の会話「あさましく」は、夕霧の概嘆の口吻を直叙する表現となつてゐると考えられる。次に、物語本文③の傍線部9「けさうび」は状態性の動詞であり、「詞書」、③の傍線部、9「けさうし」が動作的の動詞であること、物語本文にのみ用いられてゐる傍線部10「うれたけれ」と合わせると、物語本文の夕霧の会話の方が、感情的であり、かつ、傍線部11「恥ぢ給はぬよ」と「詞書」の傍線部、11の「はぢたまへかし」を対比すると、打ち消し表現を用いた物語本文の言い方が、迂遠的で、陰湿な表現になつてゐる、と言えよう。更に、物語本文には傍線部13「うちうめきて、惜しみ顔にひこじろひ給はねば」と

いう語り手による夕霧の動作が描出される。一方、「詞書」の傍線部、13「あはめられて」は、女君の動作である。地の文においても、「詞書」は、物語本文とは対照的に、直截的で単純な説明になつてゐると言えるであらう。ただ、「詞書」の傍線部、12「きこえて」は、夕霧の会話を一旦その前で切り、そして次の文句を引き出すという少し手の込んだ表現となつてゐるのだが、ここで夕霧の「言ふ」動作を、謙譲語のみの「きこえて」とするのは敬語の面からして不適切である。

(注)

『源氏物語の「わざ」「こと」「もの」との関係』、『源氏物語の探求』第三輯 風間書房1977)

このことに関連して、竹河巻に参考になる例がある。竹河巻には、二つの「詞書」があるが、その(一)の終わりの近くに用いられる、⑥傍線部、Bの「きこゆる」は、「上らうのよみかけきこゆる」とある通り、上臈女房の動作であり、物語本文の「よみかけ給ふ」の傍線部B「給ふ」による尊敬表現の方が適切であらう。なお、物語本文では、その上臈女房は「宰相の君」となつており、「詞書」には無い傍線部「人々はかなき事をいふにしねたがりて」という女房達の動作とここに四位の侍従として登場して来る「薫」の様子とが描かれており、より細密な場面描写となつてゐる。

ちなみに、この部分の「詞書」の冒頭部分にも敬語の用い方に物語本文とは異なる例があるので、触れておく。「詞書」、⑤「わろびたまへる」の傍線部、A「たまへ」は、物語本文⑤では、「わろびたりつる」の傍線部A「たり」で敬語が用いられてゐない。このように物語本文

で「若きんだち」に尊敬語を用いないのは、「四位の侍従(薰)」に同じ箇所⑤の傍線部 a「給へり」と「給ふ」を用いたのと対照的な関係で捉えられると思う。「詞書」の対応箇所も同じ。即ち、薰は他の「わかきんだち」とは違う一段上の貴公子としてこの場面に登場して来るのである(もつとも、『校異源氏物語』によれば、別本の大島本・国冬本では、青表紙本・河内本の「たりつる」が、「たまへる」となっており、「詞書」と一致する。絵巻の「詞書」が「源氏物語」の諸本の何によったのか、という別種の問題ももとより存するところである)。

ここでは、夕霧巻・③の「詞書」にのみ用いられる傍線部・12の「きこえて」の不適切なことを指摘しておきたい。「きこゆ」が「源氏物語」の成立した頃には謙讓語であったものが、『源氏物語絵巻』の成立したとされる一二世紀の前半の日常的用語では、謙讓語としては意識されなくなっていたのではなからうか。敬語の研究者によれば、謙讓語としての「きこゆ」の終焉は、一一一〇年から一一六〇年の間頃であろうと、推測されている(註)。絵巻の「詞書」の執筆者は、夕霧の、12、竹河の、Bのような「きこゆ」を、「詞書」にある種の古風さを感じさせるもの―そのような語として用いたのではないかと、考えたい。

(注)

田村忠士「今鏡における「聞こゆ」の用法について」(山口県立安下庄高校研究学報 1975)

櫻井光昭『敬語論集―古代と現代―』(明治書院 1983)の第四章「撰集抄」の敬語

泉 基博『十訓抄の敬語表現についての研究』(笠間書院 19

98)の第三章謙讓表現について

3

夕霧の「詞書」の、④部分に戻って述べる。この部分の傍線部 15は、女君(雲居雁)の会話であり、物語本文の傍線部15とは小異があるが、それよりも注意を引くのは、この会話部が「詞書」では傍線部 14より先に来るのに対し、物語本文では傍線部14の後に来ることである。この相違は、「詞書」と物語本文の相違を端的に表している。すなわち、「詞書」では、15の会話を発した後、そうは言ってみたものの、夕霧の厳しい口吻にたじくとして消息を見ないでいる雲居雁の動作、14で終わっている。それに対し、物語本文は、消息を見ないでいる動作の後に雲居雁の会話があつて、その会話のコメントが、語り手によってなされていく。それが、傍線部16「かくうるはしだち給へるに」であつて、この部分では夕霧の泰然として慌てない様子に、一度は嫉妬の鬼になった雲居雁は、かわいい女に戻つてしまひ、それを見た夕霧は「うち笑ひ」ながら、妻をなだめる言葉を述べて行くのである。物語本文は常に次なる場面を予想(予告)して作られている、と考えられるのである。

繰り返すことになるが、夕霧巻の「詞書」の終わりは、物語本文の語句の順序を意図的に入れ替え、そのことによつてこの場面(画面)の話のまとめをつけ、完結させているのである。

二 橋姫巻の詞書と物語本文

①あなたに通ふべかめる透垣の戸を、すこし押しあけて薰見給

へば、月、をかききほどに霧りわたれるをながめて、簾を²みじかく巻き上げて、人々居たり。簀の子に、いと寒げに、身細くなえはめる童ひとり、おなじさまなる大人など居たり。うちなる人ひとり、柱にすこし隠れて、琵琶を前におきて、撥をまさぐりにしつゝ、あたるに、雲隠れたりつる月の、にはかに、いと明かくさし出でたれば、¹申書「扇ならで、これしても月は招きつべかりけり」とて、さしのぞき³たる顔、いみじく⁴らうたげににはひやかなるべし。

① あなたにかよふべかめるすいがい、すこしをしあけてみたまへば、つきを、かききほどにきりわたれるをながめて、すだれ²すこしまきあげて、人々あたり。すのこに、なえはみたるわらは、おなじさまなるおとなあたり。うへなるひと、一人はしらすこしおかくれて、びはをまへにおきて、ばちをてまさぐりにしては、かくれたりつるつきの、にはかにいとあかくさしいでたれば、「あふぎならで、これしてもつきはまねきつべかりけり」とて、さしのぞき³たまへる。かほつき、いみじく⁴うつくしげなり。

①そひ臥し。たる人は、琴の上に、かたぶきか、りて、¹大書「入る日を返す撥こそありけれ。さまざまにも、思ひおよび給ふ御心かな」とて、うち笑ひ。たる。けはひ、いますすこし重りかによしづき⁷たり。

② そひふし。たまへるひとは、ことのうへにかたぶきか、りて、⁵いるひをかへすばちこそありけれ、さまざまにもかよ

ひたまへるおほむこ、ろかな」とうちわらひ。たまへる、⁶いますすこしおもりにあひ行づき。たまへり、

「申書」およはずとも、これも月に離る、物かは⁸など、はかなきことを、うち解け。の給ひかはしたるけはひども、さらに、よそに⁹思ひやりしには似ず、いとあはれになつかしうをかし。「昔物語などにかたり伝へて、若き女房などのよむをも聞くに、かならず、かやうのことを言ひたる、さしもあらざりけむ」と、にく、¹⁰推し量らるる、を、¹¹げに、あはれなる、物の隈ありぬべき世なりけり」と、心移りぬべし。霧の深ければ、さやかに見ゆべくもあらず。又、月さし出でなむと、おほす程に、奥のかたより、¹²大書「人、おはすと、つけ聞ゆる人やあらむ、簾おろして、みな入りぬ。(大系4三二四—三二五)

橋姫巻の物語本文①の傍線部1の「戸」は、「詞書」には無い。脱落であろう。2「みじかく」は、「詞書」に、2「すこし」とある。簾を「みじかく」巻き上げるといふ例は「源氏物語」にはこの一例で、注釈書は「少シ」と訳すものと「高ク」と訳すものとに分かれている。ここは、青表紙本・河内本には異同は無く、別本の横山家本・保坂本に「すこし」とある。この例の「みじかく」は、後世の「ひくく(低く)」「ひきく(低く)」の意を表す用法と認められる(註1)。「詞書」の「すこし」は別本によつたものかどうかは確定できないが、当時の言葉として理解しやすい「すこし」を用いたものであろう。本文3「(さしのぞき)たる」は、無敬語であるが、「詞書」では、3「(さしのぞき)たまへる」となっている。これは次の本文4「らうたげににはひやかなるべし」という推量の表現と「詞書」・4「うつくしげなり」という情況描写の

相違とに關連している。3・4の表現は、薫の視点からのものである。

この場面は、八宮のところに通うようになった薫が、その留守に八宮邸を訪れ、二人の姫君を垣間見するのであるが、薫にとつてはじめのうちは、「さしのぞきたる顔」が姫君の一人のものであるかが定かでない。それが、無敬語表現を採り、「べし」で終わる推量表現となっているのである。「詞書」・3・4の表現では、薫の視点は無視され絵の単なる説明になってしまっている。薫が画面の右側に描かれているが、「詞書」の表現からは「視点人物」^{注2}になつていないと言えないのではないか。

物語本文②の5「そひ臥し」たる、6「うち笑ひ」たる、7「よしづき」たりも無敬語表現で統一されている。一方「詞書」の、②・5「そひふし」たまへる、6「うちわらひ」たまへる、7「あい行づき」たまへりは、対照的に敬語が付けられている。「詞書」は、7の箇所で終わるが、物語本文の続きを見て行く。

8「うち解け」の給ひ」とあつて、ここで物語本文は、姫君達に敬語を付ける。ここは、まだ薫の視点表現が続いているところで、薫が、姫君達であることに気づいたことを示している。それは、先行部分の大君の詞「思ひおよび給ふ御心かな」という貴族の姫君にあざわしい言葉遣いによる薫の気づきを示している。9「思ひやり（し）には」、10「推し量る」、11「心移り（ぬべし）」と無敬語表現が続く、薫の視点からの描写であることが分かるが、12「おぼす（程）」で、語り手は薫から離れ、その定位置に戻っている。

この部分の物語本文は、最初の方では、薫の視点から二人の姫君に

敬語を付けず、薫が、姫君だと分かつた時点で、姫君に敬語をつけ、薫の動作を無敬語にすることによって、薫の視点が連続していることを読者に発信し、場面の終わりで語り手の定位置に戻ることによつて、語り手に一段落をつけるという手法を採っているのである。

(注)

1、北原保雄「形容詞「ヒキシ」攷」形容動詞「ヒキナリ」の確認
1「国語国文」第三七卷第五号（1968）

2、△参考文献√(注)では、画面の右側に描かれて垣間見する人物を「視点人物」と呼んでいる。この橋姫巻での説明は「鑑賞者は、あたかも垣間見している薫の眼になつてこの情景を眺めている錯覚に陥るのである。しかも、薫は客体として描写されており、ここでも同化的描写が用いられている。観察者の眼は、薫のまなざしになつてしまうのである。」となつている。物語本文について見れば、こつても言えそうだが、「詞書」の表現とは乖離した説明のように思われる。

三 宿木巻の詞書と物語本文（「詞書」の宿木(三)の部分）

（句意）なつかしき程の御衣どもに、直衣ばかり着給ひて、琵琶を弾きぬ給へり。黄鐘調の掻き合はせを、いとあはれに弾きなし給へば、女君（中書）も、*心に入り、給へる事にて、物怨じもえし果て給はず、小さき御几帳のつまより、脇息に寄りかゝり、ほのかにさし出で給へる、いと見まほしくらうたげなり。

（中書）秋はつる野辺の気色も篠す、きはのめく風につけてこそ
知れ

我が身ひとつの」として、なみだぐまる、が、さすがに恥づかしければ、扇を紛らわしておはするを、心のうちの、らうたく、推し量らるれど、^{(9) 恨めしき}かゝるにこそ人⁽¹⁰⁾もえ思ひ放たざらめとうたがはしきが、たゞならで、恨めしきなめり。

心にいり たることにて、えをじはせず、ちかきみき丁のつまより、けうそくによりかかりて、なやみたるさまし
てさしいでたまへる、いとみまほしくらうたげなり。

「あきはつるのべのけしきもしのす、きはのめくかぜにつけてこそみれ

わがみひとつの」とてなみだぐまる、が、さすがにはづかしければ、あふぎをまぎらはしておはするこ、ろのうちも、らうたく、おぼしやられるれど、かゝるにこそひともおもひはなれざらめとうたがはしきかたぐおぼえて、うらみたまふなめり。

(大系5一〇三一—一〇四六)

「詞書」は、物語本文の女君⁽¹¹⁾の*「心」の部分から始まっている。物語本文はこの箇所傍線部1「(心に入り)給へる」と敬語をつけるが、「詞書」は傍線部、1「心にいりたる」と無敬語である。ここは人物視点表現であろうはずはなく、「詞書」は敬語を脱落している。傍線部2「ほのかに」が「詞書」では傍線部、2「なやみたるさまにて」とあって、大きく異なっている。「詞書」のこの説明は身重で苦しげであることを言ったものだが、そのような様子は絵では描き出せないからである。物語本文の方は、前からの続きで読者には分かっていること

あるので「ほのかに」という動作を修飾し補う語を用いているのである。

傍線部3「推し量らるれど」、4「恨めしき(なめり)」は、句官の視点表現であり、無敬語となっている。一方、「詞書」の方は傍線部、3「おぼしやられるれど」、4「うらみたまふ(なめり)」と敬語を付している。この部分の絵には視点人物は描かれておらず、橋姫巻のような問題は無いが、上述の如く、「詞書」はあくまで絵の説明と補足にとどまっていると言つてよさそうである。

終わりに 「詞書」は説明し、物語本文は描写する

稿者は、以前に『源氏物語』本文と柏木(二)・(三)の「詞書」とを対比して、その相違を論じたことがある⁽¹²⁾。その拙論では、『うつほ物語』の絵解の用語と表現の特性と、『源氏物語絵巻』の詞書のそれを一応同じようなレベルのものとして仮定して論じ、また論文のテーマ自体が大きすぎたために、明確な結論を導くことに成功しなかった。ただ、この稿でも繰り返し返しておきたいことは、「柏木(二)」の部分に対応する『源氏物語』本文で、柏木が夕霧に向かって嘆き訴える会話の中に用いられた自「卑下の」給ふ「⁽¹³⁾」四例が、詞書の方では、ことごとく「侍り」に変えられていることである。これは、「詞書」が書かれた時期に「給ふ」⁽¹⁴⁾「⁽¹⁵⁾」が分かりにくくなっていたためであろうと、考えたのであるが、「分かりにくくなっていた」ということは、謙譲語の一種としては、理解されていたことも意味している。実際、現存する「詞書」には、「竹河(二)」に三例あって、この方は、本文をそのまま写したものである。興味深いのは、「柏木断簡(二)」の「給ふ

「下二巻」は、本文には「侍り」とあることである。この本文は、青表紙本・河内本には異同がなく、別本の国冬本に「侍り」とあるのであつて、「夕霧」の項で付記したことが、今後の課題であることを感じさせるものである。ただ、ここで多少の補いをすれば、本稿の「橋姫」「宿木(三三)」の項で採り上げたような人物視点からするところの無敬語表現のようなものも含め、敬語ことに自己卑下を含めた謙讓語の特性の考察は、平安時代の物語の表現の究明にとつて、これまで論じ尽くされて来ているようではあつても、なおかつ登場人物の心中を描き上げていく物語用語として見過せぬものであることを、「絵巻」詞書の検討を通して実感するものである。

(注)

『うつつは物語』本文と『源氏物語』本文―「絵巻」と「絵巻詞書」との対比を通して」、『山口国文』第二二号 1998